

施蛰存と陳西滢の魯迅「明天」論

齋藤敏康

はじめに

1940年（民国29年）6月16日に発刊された国立西南聯合大学師範学院の学術誌『国文月刊』（第1巻第1期）に施蛰存が寄稿した「文芸作品解説之一 魯迅的『明天』」（以下「明天論」）について、この学生向けに書かれた解説（評論として扱う）の内容を紹介し、この評論がもつ歴史的な意義を考えることが本稿の主要な課題である。併せて施蛰存の「明天論」を批判した陳西滢の「明天論」も紹介し、陳西滢の魯迅文学観などにも言及したい。

施蛰存の「明天論」はフロイト心理学を援用した潜在意識的性愛論とでも称すべき議論であった。しかしこの評論は当時の重慶の論壇で激しい批判に遭遇した¹⁾。そしてその後数十年の間何故か魯迅の作品論としてもほとんど論じられることはなく、施蛰存文学論の範疇からも抜け落ちたままになっていた²⁾。

数十年を経てこの評論の存在に再び触れたのは実は施蛰存自身であった。「懐開明書店³⁾」と題する回顧的な随筆の中で、施蛰存は開明書店が出版元になった『国文月刊』に魯迅の「葉」（蛰存の記憶違いで、実際には「明天」）に表れた潜在意識的描写を詳細に解明したが、魯迅の著作の歪曲、侮辱であるという大衆的な批判が相次ぎ、朱自清や沈從文などの忠告もあって、それ以降、魯迅小説の心理分析は放棄したと語った⁴⁾。その後、80年代から90年代にいたる施蛰存研究においてはさすがにこの評論の存在に触れる例はあるものの、40年の重慶における施蛰存批判をほぼ踏襲するばかりであり、中国国内では本格的に再評価しようとする論は未だに存在しないといえる⁵⁾。

しかし魯迅文学の解析方法が多様化し、かつて施蛰存が試みた心理分析を含めて、さまざまな読みを通じて魯迅文学の新しい側面が指摘されている現在の状況の中で、民国期にすでに当時の主流であった人文主義的な読み、あるいは左翼文学的な解釈を超えて、魯迅の小説について初めてフロイト的、性心理的な読みを提示した施蛰存の独自性はもっと評価されてよいし、小説批評史の上でも積極的に位置づけられるべき価値を有していると考えられる。

（Ⅰ）『国文月刊』とそこにおける「明天」論争

『国文月刊』での「明天論」論争は次のようなものであった。

まず、雲南大学国文系助教授であった施蛰存が幼少の頃からの親友だった『国文月刊』主編の浦江清（西南聯合大学国文系）の要請に応じて、40年6月『国文月報』創刊号に、

施蛰存「文芸作品解説之一『明天』」（第1巻第1期，1940年6月）

を発表する。これに対して、陳西滢（武漢大学文学院）がその年の11月に、

陳西滢「『明天』解説的商榷」（第1巻第5期，1940年11月）

を発表して、施蛰存の評論を批判した。また同じ号に筆名・忠による

忠「『聽到』和『知道』的商榷」（第1巻第5期，1940年11月）

も掲載される。

さらに、施蛰存は最初の「明天論」発表してから昆明を離れていたが、廈門大学で自らの論への批判を知り、41年5月、反論として、

施蛰存「關於『明天』」（第1巻第11期，1941年5月）

を寄稿する。

『国文月刊』を舞台にした遣り取りはこのようであったが、その他に特に重慶の雑誌には施蛰存の論への批判的な評論がいくつか発表された。現在までに筆者が目にしえたのは以下の評論である。

羅遜「学习与研究」（『文学月刊』第2巻第3期，1940年10月）

海銀「讀了施蛰存解説魯迅的「明天」以後」（『学習生活』第1巻第6期，1940年10月）

羅遜「關於魯迅的「明天」」（『抗戰文芸』第6巻第4期，1940年12月）

龔螢「魯迅的「明天」」（『学習生活』第2巻第2・4期⁶⁾1941年3月）

施蛰存によれば、重慶方面からの批評はかなりの多数に上ったようであるから、なお詳細を検索する必要は感ずるが、如上の数編からも批評の傾向と論旨はほぼ窺える。また本稿で考察する対象は施蛰存と陳西滢の「明天」論であるので、ここでは取り敢えず以上の文献を視野にいれて議論を進めたいと考える。

ところで、施蛰存は大学教員として学生に対する教学の観点から書いた文章が、文学誌紙において一般の文学評論とまったく同じ範疇のものとして論じられることの不適切さを指摘している⁷⁾。そこで施蛰存が学生への小説作法指南として「明天」の「解説」を寄せた『国文月刊』とはどのような雑誌であったのかについてあらかじめ見ておきたい。『国文月刊』は1940年（民国29年）6月に発刊され1949年6月まで九年間にわたり全82期を発行した。「出版者」は国立西南聯合大学師範学院国文月刊社、創刊当初の編集委員は浦江清（主編）、朱自清、羅庸、魏建功、余冠英、鄭嬰であった。開明書店が「発行所」となって昆明をはじめ桂林、成都、重慶、貴陽、衡陽、金華で発行された。

「巻首語」によれば「師範学院国文系同人が主編し文学院国文系同人と校外の国文教学に熱心な人士の協力を仰ぐ」としており、北京、清華、南開の三大学を合併・再編した西南聯合大学の師範、国文両学院の国文系教員が中心ではあるが、当時、抗日戦の大後方となっていた昆明に移住していた多数の知識人に広く開放された学術誌であったことがわかる。しかもそれは学術研究発表を専らとする研究誌ではなく、中学、大学の「国文教育」に軸足を置くことを強く意識した教育研究誌であった。「巻首語」は次のように述べている。

「国文教育は中学、大学の課題の中で非常に重要な位置を占めているし、教育部もそれを認め

ているが、抗戦以来、国文に関する教育、研究を論ずる学術誌の発刊が困難を極めている。……『国文月刊』は完全に語文教育の立場、性格をもつもので、その点で国学雑誌や文芸刊行物と異なる。従って高邁な学術研究論文ではなく、中国語言、文字及び文学上の基本知識を青年読者に与えてくれるようなものを登載したい。文芸創作は載せられないが、作家がさまざまな文学を書く方法についての文章は歓迎したい。施蛰存は雲南大学国文系の副教授であったが、このような宗旨に従って学生向けに現代文学の創作、受容の方法を解説した文章を寄せたのである。

『国文月刊』の主な執筆者は王了一（王力）、李広田、朱自清、聞一多、丁易、羅辛田、楊振声、沈從文、李何林、葉公超等、まさに「巻首語」に謳うように西南聯合大学（以下、時に聯大と略称）の内外を問わない多彩な顔ぶれであった。そしてまた『国文月刊』について特筆しておかねばならないことは、この学術誌が、戦時下、九年にわたって旺盛な国語、国文教育に関する研究を展開し、その成果と実績が人民共和国建国後の中学、大学における中国文学教学あるいは政策の確立に大きく寄与したことであり、その点で建国初期の中国文学をはじめとする文学、語学に関する教学政策を形成していく潮流のひとつとなっていることである。

大学教学における中国現代文学の位置づけに関わって、聯大の国文系が行なった歴史的な改革のひとつは、1938年に初めて語文体（白話文）購読テキストである『大一国文読本』を編撰したことであろう。翌39年6月には沈從文を、現代文学研究の専門家としては初めて師範学院の副教授に招聘して、1919年から40年の語文体文学史つまり現代中国文学史の講義を開始している。この『大一国文読本』は42年までに三回改訂がなされたが、最後の改訂本によれば文語文15篇、語文体文11篇、詩44首、付録1篇という構成である。古典文学と並んで現代文学が初めて大学教学の中に一定の位置を占めたのである。

沈從文は、14歳で軍隊生活を経験し、二十歳の頃、北京大学の聴講生をしながら文学創作を始めた新文学の作家であった。そのように国内外のアカデミズムに在籍した経歴を持たない人物が聯大の副教授に就任することも当時であっては破天荒なことであったと思われる。沈從文の講義は学生たちに大きな影響を与えた。『国文月刊』に登載されて施蛰存とともにやはり議論を呼んだ沈從文の「從周作人魯迅作品學習抒情」や「由冰心到廢名」などの文学評論はそうした講義から生まれたのであった。

こうした教学の展開に励まされて学生の創作意欲も高まった。有名なのは1944年「文芸壁報社」が主催した「五四記念文芸晚会」であって、「五四運動与新文化運動」というテーマで朱自清、羅常培、沈從文、李広田、楊振声、馮至、卞之琳らが講演を行なった。朱自清が編集していた「中央日報副刊・平明」や、楊振声主編の『世界学生』の「文芸欄」、あるいは楊振声・李広田主編の『世界文芸季刊』また沈從文と関わりの深い香港「大公報」、桂林「大公報」の文芸副刊には聯大生の文芸創作の秀作が多数登載されたのである。⁸⁾

やゝ後の事になるが、馮至、吳密、燕卜遜ら多彩な人材を擁していた聯大外文系と国文を結びつけ、文学は芸術であり、語文は科学として発展するであろうという聞一多の意見に基づいて「語文不分」を改めて中文と外文を包摂した文学院を構想したことも『国文月刊』における議論が国家の教学政策に与えた影響として銘記されている事柄である。⁹⁾

つまり、施蛰存の「明天論」も、また半年後に施蛰存を批評した陳西滢の反論も、聯大における『国文月刊』を中心としたこのような国語・国文教学の改革と実践の中に位置づけられるべき

教育研究活動であった。魯迅の「明天」を素材にして学生たちに現代短編小説のフロイト的な新しい読み方を提示した施蛰存と、それに対してロンドン大学政治経済学院ではハロルド・ラスキのもとで政治学を専攻して博士号を取得し、文学については独学であった陳西滢が19世紀以来のイギリス人文主義的な「人生の批評」の立場から「明天」を読み解いてみせたその応酬は、それぞれの論が、その適否の以前に、まず『国文月刊』という磁場において精彩を放っていると言うことができる。

（Ⅱ）施蛰存による「明天」論の展開

（1）構成と意図

施蛰存の「明天論」は九千字余の評論文である。一行の空白をもって三つの部分に分けられた「明天」一篇をそのまま三章に分ち、さらに全体を行論の必要から原作の段落をほぼ踏襲する形で三十の節に分けて(1)~(30)の通し番号を付し、番号を追いながらほとんど逐条的に細かな読みと解釈を試みている。これについて施蛰存は「文芸作品を解説するというのは、その昔、金聖嘆が水滸、西廂を批評した件のやり方を思い出させるかもしれないけれども、熟達した著作家、批評家に対してならばいざ知らず、これから文芸を学ぼうという学生たちには無益ではないと思われる」と方法的な意図を述べるが、叙述もそれに相応しく語りかけるような文体で懇切丁寧に論を展開している。

短編小説を構成・技巧の観点から解析してみせようとする動機を、施蛰存は学生たちの創作が「Ider」（蛰存は“Ider”に觀念あるいは觀念を直裁に表現する題材を含めている……斎藤注）を自由に書くこととするだけで、Iderを構造化し簡潔で力強い形式で表現することに注意を払わない。つまり創作における方法意識の欠落であり、方法意識の欠落は言語技巧の運用の稚拙さとも結びついている。要するに一篇の文芸作品がとっている構造を理解していないと述べる。多くの学生が題材捜しや觀念の獲得に夢中になるが、それが例えば恋愛に関わるものであるにせよ、また抗戦や社会性のあるテーマであるにせよ、予め一定の思惟、思想や結論が先にあるにせよ、それを表現するための素材を求めているだけであることを、施蛰存は学生の作文指導を通じて見通していたようである。学生たちが文学を創作、鑑賞する際に欠落しているのは、作品の構造を捉えようとする態度と、プロット形成における言語技巧であると施蛰存は結論づけている。そして「明天」についても主として構造と言語技巧の面からの分析に多くの精力が費やされるのであって、テーマの社会的意義などはさほど強調されない。そのため「重慶方面」からの批判は、ひとつにはこの社会的意義の欠落に集中するのである。

（2）「明天」の構成と主題

施蛰存は、「明天」という物語は三つの夜と二つの明日から構成されており、主人公の単四嫂子は物語の中で三つの夜と二つの明日を体験し、三つ目の明日に対しても想像を及ぼしているとする。つまりその骨格は、

①第一日目の夜 (1)~(6) 【第一章】

最初の「明日」(7)～(16) 【第二章】

②第二日目の夜 (17)～(19)

二つ目の「明日」(20)～(25) 【22以降, 第三章】

③第三日目の夜 (26)～(30)

三つ目の「明日」
 ということになる。¹⁰⁾

そして、①の第一日目の夜と、それに続く明日を概ね次のように解釈する。

最初の夜、[(5)]において老拱が卑わいな仄めかしをして阿五にどやされていたとき、単四嫂子は息子の発熱に怯え、苦痛の中で明日を待っているさなかであった。彼女はなぜ渴望するように明日を待つのか、明日は彼女にとってどのような意味があるのか。物語内容として語られるのは土地の漢方医の薬の効用を信じている単四嫂子の姿であり、明日になったら息子の病状が快方に向かうだろうことへの期待と願望である。そしてこの時刻には宝児はまだ熱も咳もある。つまりまだ確かに生きていたのである。このように、第一日目の夜(第一章)において単四嫂子の心を支配しているのは、それが裏ざられるであろうことを予感させる修辞は存在するとしても、明日への信頼と希望である。

そして最初の「明日」[(7)～(16)]が来る。しかし最初の明日が単四嫂子にもたらしたものは主観的な希望や願望を裏切る失望であった。息子の宝児はあっけなく死んでしまったのである。しかしその夜、作者は再び単四嫂子に二つ目の“明日”に対するはかない「夢の願望」を抱かせている[(17)～(19)]。

「眼を大きくあけて、あたりの様子を見やると、不思議な気がした。すべてありえないことばかりだった。彼女は考えた。夢を見ているだけだ。こんなことはみんな夢なんだ。明日になって眼が醒めれば、自分はちゃんとベッドに寝ていて、宝児もちゃんとそばに寝ているのだ。眼を醒まして、「母ちゃん」と言うと、元気いっぱい遊びにとび出して行けよう¹¹⁾」

しかし、二つ目の「明日」が、彼女にもたらしたものは、またしても失望と絶望であった。「あゝ、棺桶を背負ってきたのだった」[(21)]という一文を単独で一節とした叙述から、「明日」に裏切られた単四嫂子の絶望の深さを際立たせようとした作者・魯迅の意図を読み取ることができる。

施蛰存は、明日に裏切られ希望が絶望に転化する過程が、このように構成されていることを指摘する。

施蛰存の指示するこの場面は、確かに単四嫂子の絶望と喪失が語られる場面である。彼女の生きようとする意志を支えていた対象、自己の生の投影でもあり、生活のための労苦の対価でもあった対象が消失する。古い田舎女の思いつきと採りうる手段が尽くされて、なお息子を救うことはできずに、死が現実のものになってしまう。その現実の死を前にして単四嫂子はなお明日に夢の希望を託し、当然のことに再び三たび裏切られる。この無慈悲な「明日」の裏切りは、そのまま高度に観念化、抽象化された、時代の民衆の運命に対する作者・魯迅の冷静な洞察であって、つまりは魯迅の思想的核心の表明である。施蛰存は、魯迅が「あゝ、棺桶を背負ってきたのだっ

た」という一文を単独で一節としたことの意味を重視して、この主人公の内面の独白に重ねた叙述から魯迅の意図を読み解こうとしており、こうした所に彼の方法意識が表れているのだが、この一文の解釈を含めて、施蛰存はここで魯迅の思想的核心を正確に読み取っている。

自らのこのような解釈を承けて、施蛰存は次のように続ける。

魯迅が『呐喊』『自序』で『『明天』でも、単四嫂子がついに息子に会う夢を見なかったとは書かなかったのである」と、単四嫂子のために一点の慰めを残しているけれども、単四嫂子が仮に夢を見たとしても、夜が明けて感じるものはやはり失望でしかなかったことは明瞭に理解できる。「あの暗夜だけが明日になり変わろうとして、この静寂のなかをひた走りばかりだった」〔30〕。単四嫂子によって代表されるものは、つまりこのような静寂の中をひた走りながら、相変わらず失望を得ることができるだけの「明日」という人生なのである。

このように、テーマの次元で「明日」に表出した、あるいは仮託された魯迅の思想的核心について、施蛰存の理解は明快でありまた妥当である。

その上で、施蛰存は「明天」における母性愛と性愛という二つの“愛”の存在を指摘するのである。

（3）母性愛から性愛への隠微な移動（その1）冒頭の伏線

施蛰存の「明天論」の新しい部分を総括的にいえば、「明天」には母の子に対する愛情すなわち母性愛と、女の男に対する情欲すなわち性愛の両面が描かれており、母性愛は主人公の意識に顕在しているので明かに描写されるけれども、性愛は主人公の潜在意識の裏に伏在しているので作者の描き方は隠微であるというものであろう。つまり「明天」という物語が表現している主たるモチーフとしての母性愛に対して、それが正統な読みであると首肯しつつ、それに拮抗する伏在的なモチーフとして性愛の存在を指摘することが施蛰存の論理的な帰結である。それゆえ、この論理的帰結の形成に関わる論述をつなげながら施蛰存の論を再構成してみたい。

まず施蛰存は冒頭の一節を問題にする。

「音がしないな、ガキがどうかしたかな」

赤鼻の老拱が黄酒の杯を手にとって、そう言いながら、隣の家のほうへあごをしゃくった。青肌の阿五は杯を置くと、その背中をいやというほどどやし、ろれつのまわらぬ口でわめいた。〔1〕

「お前……お、お前また何を考えているんだか……」

だいたい魯鎮は辺鄙な土地で、古いところがある。初更にもならぬうちに、みな戸を下ろして寝てしまう。夜ふけになっても寝ないでいるのは二軒だけである。一軒は咸亨酒場で、飲み仲間が数人、スタンドをかこんでいい機嫌になっている。もう一軒は壁一枚隔てた単四嫂子の家だ。彼女は一昨年後家になって以来、その細腕で綿から糸をつむぎ、それで彼女自身と三つになる息子とが食べなければならぬ。だから、寝るのも遅いのである。〔2〕

ここ数日、たしかに糸紡ぎの音がしなくなっていた。ただ夜ふけに起きているのは二軒だ

けだから、この単四嫂子の家で音がしても、聞こえるのはむろん老拱たちだけ、音がしなくても、それに気づくのは老拱たちだけなのである。〔(3)〕

老拱はどやされたが、いい気持ちそうに、ぐいと飲みほすと、ウーウーと小唄をうなりはじめた。〔(4)〕

以上の四節について、施鵬存は次の指摘を行なう。

「音がしないな……ガキがどうかしたかな」、すると阿五が「お前また何を考えているんだか……」と返す。音がしないのは誰の音がしないのか。ガキがどうかしたか、とは宝児のことを心配してのことではない。「お前また何を考えているんだか」という科白から悟るべきことがある。それは単四嫂子は器量よし（郷下美人）の女であったということだ。老拱が「想心思」しているだけでなく、阿五もまた「想心思」している。単に一度だけの事ではなく、とっくの昔から「想心思」している。「想心思」を口の端に乗せてどやされても「いい気持ちそうに……小唄をうなりはじめる」

ここで与太者の動作や酒飲みの性癖の描写は見事なのだが、もし老拱と阿五の二人の会話が単四嫂子とまったく関わりのないものなら、この最初の四節、特に(1)と(4)の描写はすべてムダなものということになってしまう。

それでは、(1)および(4)で老拱、阿五と単四嫂子はどう関わっていると、施鵬存はいうのか。寡婦である単四嫂子は器量よしでもある、そして老拱と阿五はこの寡婦である器量よしの女を、生活に追われながら子育てに精をだす健気な女としてではなく、自らのよからぬ下心を実現するための性的な対象として想起し関心を注いでいるというのである。この冒頭の(1)～(4)節に対応するのは最終節の一つ前の²⁹節のやはり同じ酒場の描写であって、単四嫂子の物語はこの二つの同じ場の描写によって枠づけられているのだが、一切が終わってしまった後で、老拱はまた何事も起こらなかったかのように「お前ばかりが　いとしゅうて、　ひとりぼっちの……」と小唄を唄う。ここは原文では「我的冤家呀！　可怜你，　孤另另的」となっており、言わんとする所はより具体的である。老拱と阿五の卑猥さを含んだ仄めかし、そしてまんざらでもなさそうな上機嫌さかげん、というこの描写は単四嫂子が宝児を一心に思いやる母性愛の物語が、単純にそれだけに終始するのではなくて、その物語の始めから周囲の男たちの欲情の対象としても語りだされており、単四嫂子の母性愛は性愛という伏流水を含んで始まっているということなのである。

構成から言えば、施鵬存も述べるように冒頭の四節、特に(2)、(3)節は小説の場（Setting …施鵬存注）を説明している。ここで老拱と阿五を配するのはひとつには単四嫂子の印象を強めるためである。しかしそれだけではなく、直接に二人を描写することは間接に単四嫂子を描写することである。何故ならば二人は小説の場の点景として配されているのではなく、施鵬存が「生活力」（生活力量）と表現する、単四嫂子の生活の持続を支配している潜在的な力に関与する役割を担っているからである。ある意味で二人は、単四嫂子という女性（寡婦）の生きる力の根源に関与する位置を、物語において与えられているのだと施鵬存は指摘する。

（４）母性愛から性愛への隠微な移動（その２） 二つの“愛”の混淆

次に、冒頭の場面に続いて施鰲存は、単四嫂子が医者何小仙から処方箋で薬を調合してもらい帰る道すがら阿五に出くわす「明天」第二章の、主に(11)節(12)節(13)節を解釈しながら性愛論的なモチーフの存在を明らかにする中心的な問題提起を行なう。やや長くなるが、この三節と施鰲存の議論を引用したい。

日はとうに昇っていた。単四嫂子は子供を抱き、薬の包みを持って歩いていたが、歩くにつれて重くなって来た。子供はひっきりなしにもがくし、道もますます遠くなるような気がした。どうにもならなくなって、道ばたの屋敷のしきいに腰を下ろして、しばらく休んだ。着物がだんだん肌にひんやりして来て、自分が全身汗びっしょりであることに気づいた。宝児は眠りこんだらしい。彼女はまた立ち上がって歩いたが、やはり重くて抱いてられない。と、耳もとで突然声が出た。

「単四嫂子、おれが抱いてやるよ」。青肌の阿五の声のようだった。

顔をあげて見ると、まさしく青肌の阿五で、酔ったとろんとした眼で後をついて来る。

〔(11)〕

単四嫂子はこのときには、天上の將軍でも降りて来て、手を貸してくれないか、と思うほどだったが、阿五では願い下げだった。しかし、阿五は俠気を見せて、何がなんでも手伝ってやる、と言う。それで、しばらく押し問答したあげく、とうとう承知させられてしまった。彼は腕を伸ばし、単四嫂子の乳房と子供のあいだにぐっとさしこんで、子供を抱きとった。単四嫂子は乳房がカッとほてるのを感じ、瞬間顔から耳のつけ根まで熱くなった。〔(12)〕

彼ら二人は二尺五寸ほど離れて、いっしょに歩いた。阿五が少し話しかけたが、単四嫂子はほとんど答えなかった。しばらく歩くと、阿五は、昨日、仲間と約束した飯の時間が来たからと言って、子供を返した。単四嫂子は子供を受け取った。さいわい、もうすぐ家だった。向かいの王九媽が道ばたに腰を下ろしているのが見えていた。(以下略)〔(13)〕

この三節にまたがる叙述の、特に単四嫂子の心理描写について、施鰲存は次のような解釈を試みる。

しかしながら、この第二章において、作者が描いている単四嫂子の心理は、もはや単純に宝児に関わる一切のことではなくなっている。非常に謹厳な筆遣いのもとで、作者はむしろ単四嫂子の一面のある隠微な心理を漏らしている。第(11)節で、作者はなぜ単四嫂子が「重くて抱いてられない」「支掌不得」と描写したのか、なぜ「単四嫂子、おれが抱いてやるよ」(“抱勃”はつまり“抱抱”のことで、早口で言うと“抱勃”に変化してしまう)という声を聞くとすぐに「青肌の阿五の声のようだった」と感じたかのように描いたのか、なぜ彼女は「天上の將軍でも降りて来て、手を貸してくれないか、と思うほどだったが、阿五では願い下げだった」のか、しかし道々一緒に「しばらく歩い」た時、単四嫂子が阿五の問いかけに「ほとんど答えなかった」ので、口実を設けて「子供を返した」のか、阿五が単四嫂子の手から「子供を抱き取る」時、作者はなぜ彼が「腕を伸ばし、単四嫂子の乳房と子供のあいだ

にぐっとさしこんで、子供を抱き取った」というように説明したのか、その時、なぜ「単四嫂子は乳房がカッとほてるのを感じ、瞬間顔から耳のつけ根まで熱くなった」のか。読者が、もしこれらの問題を研究してみるならば、作者がここで私たちに伝えたかったこと、すなわち、阿五が単四嫂子を思っていただけではなく、単四嫂子の潜在意識においても、阿五は存在していないこともないということを知ることが出来るであろう。何ゆえにそのように言えるのかといえ、ここに証拠が一つある。それは作者が第(16)節で補充していることがらである。皆は単四嫂子のために忙しくしていたし、阿五もまた「ぜひおれにやらせてくれ」（「願意自告奮勇」）と言ったが、しかし「王九媽は許さ」なかった。そこで阿五は「おいぼれが」と罵った後も、その場を立ち去らずに相変わらず「おもしろくなさそうに口をとがらしてつたっていた」。このような描写は、阿五が単四嫂子に対してよからぬ考えを抱いているということ、王九媽ですら知っていたということ、王九媽が許さなかったと、なぜわざわざ説明するのか。これは、単四嫂子の心の中にも阿五の影がひとつ存在していることを表わしているのではないか。

この一連の心理は非常に微妙なものなので、作者も決して直接的な筆調で正直に叙述してはいない。あちこちから筆を下ろしてその意味を浮かび上がらせ、読者自身に考えさせるように仕向けている。そうしておいて、第(17)節から(21)節まで、作者は今度は手法を変えて直接的に単四嫂子の顕在意識がどのように明日を願望していたかを叙述したのである。

魯迅が「隠微な筆遣い」で仄めかしたこと、そして施蟄存がそれを引き伸ばして明るみに出して見せたこと、その内容とはつまり、生きるよすがであった宝児の喪失が不可避であることを絶望の中で悟らざるを得なくなるその刹那に、あるいはまた宝児の死が現実のものとなってしまった時にあって、単四嫂子の生きようと意欲する力の根源は、無意識の裡にもせよどこを向きつつあったのか、何を求めていたのかということなのである。単四嫂子の意識の中で、宝児を失ったその間隙を埋めるように阿五の存在が意識されてくるというのは、ほとんど彼女の生きるための自己保存的な本能に根差しているのではないかと、施蟄存の言わんとする所を敷衍すれば、言うことができるであろう。こうした解釈の妥当性を、施蟄存は、宝児の死と孤独から夫の回想へと向かう単四嫂子の意識の流れの裡により明瞭に見いだそうとしている。

（5）母性愛から性愛への隠微な移動（その3） 象徴的な生きる力として

第三章は最終章であって、ここで物語は完結するけれども、心理描写のコンテクストから見た時に、この小説の結末には検討すべき意味が存在すると施蟄存は述べる。

葬儀の後の、単四嫂子の虚脱感を描写した第(25)、(26)、(27)の三章が最終章の中心である。

単四嫂子はひどい眼まいを感じたが、しばらく休んでいると、なんとかおさまった。だが、すぐつづいてひどく変な気がした。これまで遇ったことのないことに出会った。ありそうもないことだが、たしかにそれが起こったのだ。考えれば考えるほど不思議な気分になる。もう一つ異様なものを感じた この部屋が急にひっそりとしてしまったのだ。〔25〕

彼女は立ち上がり、灯をつけた。部屋はよけいひっそりとして見えた。ふらふらしながら戸を閉めに行き、ベッドのへりにもどってすわった。紡ぎ車が音もなくゆかに立っている。気を落ち着けて、あたりを見まわすと、ますます身のおきどころがない感じがした。部屋がひっそりとしているだけでなく、置いてある道具もいやにがらんとしてしまった。大きすぎる部屋がまわりから彼女をとりかこみ、がらんとした道具がまわりから彼女にのしかかって来て、息苦しくなる。〔26〕

彼女はいま、ほんとうに死んでしまったのだ、と思った。この部屋を見たくなくて、灯を吹き消し、横になった。彼女は泣きながら考えていた。あのころ、自分が綿を糸につむいでいて、宝児がそのそばにすわって茴香豆を食べていた。小さい黒い眼を見はって何か考えていたと思ったら、「母ちゃん、父ちゃんがワンタン売ったんだから、おらも大きくなったらワンタンを売るよ。売ってお金をたくさんもうけるんだ みんな母ちゃんにあげるね」と言った。あのころは、ほんとにつむいでいる糸までが、一寸一寸みんな意味があり、一寸一寸みんな生きているように思えたものだった。だのに、いまはどうだろう。いまのことについては、単四嫂子は実際何も考えられなかった。（以下略）〔27〕

施蛰存は、特にこの三節に着目し、第二章の解説でいくつもの問い掛けを重ねながら自ら提出した問題について以下のように結論づけるのである。

この章において作者が力を入れて叙述しているのは、単四嫂子の三つ目の明日にいたる前夜の心理であることに注意しておく必要がある。その時の彼女の心理はどのようであったのか。まず彼女が感じたのは孤独である。第〔25〕、〔26〕、〔27〕の三節の文章は、作者が力を込めて彼女の孤独を彫琢した部分である。なぜ彼女は孤独になっていったのか。ただ宝児が死んだ為ばかりではない。夫と死に別れて以来、宝児は彼女の生活の伴侶であったし、彼女に生き続けることを願わせる力であったといってもよい。それゆえに作者の筆の下では、宝児は宝児という三歳の子供なのではなくて、象徴的な意味をもった生活力なのである。その生活力を失ったことによって孤独を感じ、孤独であるがために新たな生活の力を獲得しようと企図する。たとえ本当に獲得することは出来なくとも、少なくとも夢の中であったとしてもそれを得たいと願うのである。この章で、作者が正面から叙述する方法によって表現しようとしたのは、このことである。

宝児は一般的な生活力の象徴に過ぎないので、作者の描く単四嫂子は必ずしも、もう一度宝児のような子供が欲しいとは望んでいない。むしろ、彼女が望むのはこれまでのように彼女を活かし続けてくれる力を得ることなのである。だからもし単四嫂子の心の中で他の人物が彼女の生活の力となり得るのであれば、彼女が宝児を忘れてしまうこともあり得るのだ。ここでひとつ疑問が生じよう。それではこれまでに、作者の筆は単四嫂子の心に別のもう一つの生活の力を生じさせたことがあったであろうかと。あったのだと私は言おう。ただし、この面に関しては作者は非常に韜晦した描き方をしていて、粗い読みの読者には見えてこないのである。だがもしこの小説の読者でありながら、どうしても見えてこないとすれば、その人はこの小説について一字も読めていないのだと言えるだろう。

この三節で魯迅が力を込めて描いているのは単四嫂子の孤独である、という施蛰存の指摘に異議を挟む余地はあまりあるまい。さらに説明を補うならば、ここで語られているのは単四嫂子の虚脱と喪失と追憶とであろう。すべての儀式が終わり、村の人たちも去っていった後に訪れる「ひどく変な」「不思議な気分」と「異様な静けさ」の感じを伴う虚脱の感覚、宝児がいなくなったことによって、はなはだしくバランスを失った部屋のたたずまいと、それを息苦しいと感ずる程の喪失感、そして「ほんとうにつむいでいる糸までが、一寸一寸みんな意味があり、一寸一寸みんな生きているように思え」、自己の生きる意味をはっきりと実感することができた、宝児と夫との日々の暮らしの追憶。第⁽²⁵⁾、⁽²⁶⁾、⁽²⁷⁾の三節で語られているのは、そのような内実を備えた“孤独”である。

その上で、施蛰存は、次のような卓抜な指摘を行なう。

「宝児は彼女に生きることを願わせる力であった。」(一股使她活着下去的力)、「宝児は宝児という三歳の子供なのではなくて、象徴的な意味をもった生活力なのである。」(宝児並不是宝児那个三岁的孩子，而是一个有象征意味的生活力)。そして追憶の中で夫が思い出されることの意味についても、「いずれにしても彼女の潜在意識の中には彼女の夫が思い出されているのである。夫もまた彼女にとって、一つの生活の力であった」。そして続く第⁽²⁹⁾節では、この機に乗じて単四嫂子をわがものにしようという魂胆を王九媽らによって見抜かれた阿五が、叶えられなかった己の妄想を吐露するように「お前ばかりが　いとしゅうて　ひとりぼっちの……」(我的冤家呀！可怜你　孤另另的……)と、相変わらず飲んだくれて唸っている。

これらを踏まえて、施蛰存が展開する次の部分は、いわば施蛰存の独自の読みの結論である。

阿五が単四嫂子を「考えて」(「想心思」)いることは、作者がこの小説の中で明白に書いてあることである。それでは単四嫂子の方はどうなのであろうか。私は第二章の解説で、単四嫂子の心の裡にひとつの阿五が存在していないわけでもない、作者に代わって述べた。それならば作者は第三章で、なぜ明白に単四嫂子が阿五をどのように思っているのかということとを叙述しないのかと問われるかもしれない。ここで私が言わねばならないことは、作者の筆になる阿五は、阿五という一人の飲んだくれではなく、彼が仮に代表しているのは、単四嫂子を生活させていくもう一つの力量なのだということである。この力量がつまり性愛である。単四嫂子は阿五の誘惑は拒みえたかもしれないが、しかし阿五に代表されるところのそうした性愛の欲望はいまだ必ずしも拒みえてはいない。そうでなければなぜ「乳房がカッとほてるのを感じ、瞬間顔から耳のつけ根まで熱くなる」のを感じたのだろうか。なぜ宝児から彼女の夫へと連想が飛んだのであろうか。

今、私たちは次のように総括してもよいであろう。この小説において、作者は単四嫂子の二種類の欲望　母性愛と性愛　を描いている。一人の女性の生活の力は、この二つの欲望、あるいはどちらか一つの欲望と繋がっているのである。母性愛は単四嫂子の意識に顕在しているので、作者は明快に描いているが、性愛は単四嫂子の潜在意識の裡に伏在しているので、作者の描き方は隠微なのである。

小説のリアリティを支える、人間の生理的感情的現実において、性愛と母性愛は隔然と離れて存在しているわけではない。だが母性愛の表現だけを肯定し、性愛の顕現を否定するものは、まさしく社会的価値意識や社会的規範の圧力である。そうした人間の性と愛の自然や社会的現実に立って、施蛰存がここで踏まえているのは、フロイトの精神分析論、特にその中の欲動論であると思われる。

フロイトによれば、人間の欲動（Trieb）または本能は究極的にはエロスの本能と死または破壊の本能とに帰することができる。そのうちエロスの本能（Eros-instinct）はさらに自己保存の本能と種族保存の本能とに分かたれるが、同時により大きな統一をうみだし、これを維持しようとする統合の欲求でもある。死の本能（Death-instinct）はこれに反して統一を崩壊させ事物を破壊しようとする欲動そのものであり、生あるものを死によって無生のものに帰せしめる回帰的な力であって、生命現象の中にはこの二つがともに働きあっているものと考えられる。

エロスの欲動は身体的欲求から発して、これを充足させることを目標としており、その充足行動の対象を持っている。欲動は性格としては保守的なものであり、以前の状態への回帰への試みと位置づけられる。これらの欲動の原動力となるものは心的エネルギーであり、エロスの本能の原動力はリビドー（libido）と呼ばれる。¹²⁾

施蛰存は、このようなフロイトのエロスの欲動論を受容しながら、自己保存としての性愛と種族保存としての母性愛が、単四嫂子の生活への意志を支える力として相互補完的に機能しており、究極的には不可分であることを読み解いたのだと言える。

（Ⅲ） 陳西滢の「明天」論と施蛰存の反論など

（1） 陳西滢とその魯迅文学観

施蛰存のこのような「明天」論に対して、陳西滢は1940年11月、『国文月刊』第1巻第5期に『『明天』解説的商榷』と題する施蛰存批判の文学評論を寄稿する。

陳西滢（1896-1970）、原名は陳源、字は通伯、1896年3月24日、江蘇省無錫の生まれである。南洋公学付属小学校、南洋公学中院を経て、1912年英国に留学。ロンドンで高校を終えた後、エジンバラ大学、ロンドン大学で政治学を専攻。文学は独学であったという。1922年、10年に及び留学から帰国し、蔡元培に招かれて、26歳で北京大学文學院外文系（英文系）教授に就任。北京大学時代には「現代評論」「新月」等に拠りながら王世傑、楊端六、皮宗石、楊振声ら、また胡適、徐志摩らと共に自由主義的な知識人として活躍する。24年、タゴールの来華に際して徐志摩とともに接待にあたる。この時、生涯でただ一度だけ魯迅と同席したという。27年に燕京大学学生であった頃から相識した凌叔華と結婚、この年の夏、「北京大学研究院駐外撰述員」の身分で凌叔華とともに日本各地を旅行している。29年5月、武漢大学文學院院長として、校長として赴任する王世傑と共に赴く。抗日戦勃発後、武漢大学の疎開にともなって四川省樂山へ移動。凌叔華によれば、抗戦期には中央日報等を舞台に多くの政治、社会評論を執筆して抗日を訴える論陣を張ったという。¹³⁾ 未見であるが、この時期の言論にむしろ「政治学者」としての陳西滢の真面目

が窺えるのかも知れない。武漢大学文學院の発展にも尽力しており、元々、王世傑の招請に応えて「武漢大学をコロンビア大学、ケンブリッジ大学などと並ぶ世界的な大学にすべく努力する」という決意だったが、教学行政に携わり、文學院に英国文化、短編小説、翻訳、世界名著などの課程を設置したという。43年に英国に行き、戦後は国民党政府外派文化官員の身分でロンドンに滞在¹⁴⁾、70年3月29日、当地で客死している。

文学的な著述は1924年から27年の間に集中している。翻訳では英国の女性作家キャサリン・マンスフィールドの作品を多く手がけている。28年、散文集『西滢閑話』を出版。『西滢閑話』は同時代においてすでに散文としての評価は高く、施蛰存も編集に加わった民国25年出版の教育部審定『初中当代国文』の第一冊に「管閑事」、第二冊に「哀思」、第三冊に「西滢閑話」がそれぞれ採られている¹⁵⁾。

客観的な言い方をすれば、陳西滢には予断なく魯迅の文学を評論できる機会はほとんどなかったであろう。西滢の魯迅に対する言説は、その始めから濃厚に立場の違いを際立たせる色彩を帯びていた。言うまでもなく二人の出会いが、25年の北京女子師範大学事件での対立を通じてであったためである¹⁶⁾。

従って、西滢が魯迅の作品の内容や芸術的風格に言及したケースも決して多くはない。例えば、女師大事件を背景にして書かれた何篇かの散文のうち、「創作的動機与態度」¹⁷⁾では一般論が述べられているだけで、魯迅の名は出てこない。「版權論」¹⁸⁾でも魯迅、郁達夫らの創作集の版權は保護されるべきだという文脈で、魯迅の名前が出てくるが、いずれも魯迅側からは辛辣な当て擦りの反撃の材料にされている。陳西滢からのはっきりとした揶揄は魯迅らの「対於北京女子師範大学風潮宣言」を批評した「粉刷毛廁」¹⁹⁾であって、「北京の教育界で最大勢力を占める某籍某系の人たちが陰で唆しているそうだが、私は信じない」という文脈で浙江系の人たちを当て擦っている。さらに「剽窃与抄襲」と題された文章²⁰⁾では、魯迅の『中国小説史略』は日本の塩谷温の『支那文学概論講話』を藍本にしていながらまったく断わりがないと名指して非難している。こうして相互非難の拡大と混迷は、26年3月18日の北京の学生たちの請願行動に対して官憲が発砲して数十人に上る死傷者を出した事件をめぐる議論の遣り取りにまで繋がってくる。そして、そのような厳しい対立のさなか陳西滢は26年4月に著わした「新文学運動以来の十部著作」(上・下)²¹⁾と題する評論で、魯迅の『呐喊』を新文学の成果として表揚する十冊の著作の中に加えて、次のようにコメントしている。

魯迅氏が描く、彼の回想中の故郷の人々と風景はすべてとてもよい作品だ。しかし『孔乙己』、『風波』、『故郷』の中の田舎の人々は、言葉づかい、立ち居振る舞いはとても素晴らしいけれども、まだ外面的な観察であり表面的な描写である。私たちにはあのように描き出す力量はないけれども、私たちの記憶の中の田舎の人々もあんな風であったと思うのだ。『阿Q正伝』になると大いに違ってくる。阿Qはひとつの type であるばかりではなく、生き活きとした人物ともなっている。彼は李逵、魯智深、劉老老と同じように活潑で興味を引く人物であって、これからもおそらく同じように色褪せることはないであろう。(私は、私が魯迅氏の人格を尊敬していないからといって、彼の小説をよく言わないでおくことはできないし、また私は彼の小説に感服するが故に、彼のその他の文章も賞賛するということもできない。私は、彼の雑感

『熱風』の中の二三篇を除いて、その他は実際に一読の価値もないと思う。）

雑感文に対する陳西滢の評価が厳しいのは当然で、この時期、魯迅の雑文は『華蓋集』、『華蓋集続編』に収められたものだが、その多くは女師大事件に関わって陳西滢らとの論争の中で書かれたものだからである。この文章の括弧の部分、閻晶明氏のように「中立的な公正な紳士的な態度を装っていながら、私憤によって措辞、論旨が乱されている」と評して、西滢の魯迅小説観の「混乱と矛盾」を指摘することも失当ではないであろう（注22）。また当の魯迅も、自らを「評価」したこの一文を『華蓋集』に対する「反広告」と皮肉り、西滢のどのような文章であれ「醉翁之意 不在酒」という態度で諷刺・批判することに徹していたのである。

しかし、激しい論争のさなかに著わされたこの評論で、西滢が論敵・魯迅の文学に下した評価が、概ね公正で真つ当なものであったことは平心に読めば明らかなことである。西滢と魯迅には共通の文学世代的な基盤が存在する。それは五四文学革命の進歩性とその達成に対する揺るぎのない確信である。民国期の新思想、新文学の先鋒として『胡適文存』を上げ、思想方面では吳稚暉、学術方面では顧頡剛の『古史辯』をそれぞれ上げて、新文化運動における貢献を評価した上で、『新青年』に「文学改良趨議」が発表されて以来、十年間の新文学における成果として、郁達夫「沈淪」、魯迅「呐喊」、徐志摩、郭沫若、冰心と並べ記していく文学観は極めてオーソドックスな五四文化運動世代のそれであろう。

その点では、施蛰存はむしろ“世代”を異にする。施蛰存自身も上記の作家を五四文学の第一世代と位置づけており、年齢的には九歳年上の陳西滢も第一世代に含めている。それに対して施蛰存及び、彼が「同世代」と位置づける戴望舒、馮雪峰、丁玲、沈從文ら30年代に入って活躍する第二世代は、多かれ少なかれ五四文学を乗り越えることを自己の文学的達成の目標の一つとして意識している世代であり、ソビエトの文芸論や両大戦間のヨーロッパ新思潮などに対しても、一般には施蛰存らの世代の方が鋭敏な感覚で関心を示していたといえる。

陳漱渝氏は、英国の自由主義思想の薫陶を受けて、儒教とも調和し「中庸の心理状態」を形成した陳西滢と、自由主義への反対を特徴とする「反中庸の心理状態」を堅持していた魯迅では、政治観、文学観の隔たりは大きかったと述べる²³⁾。しかしそのような関係にありながら、魯迅文学をフロイト的な欲動論で分析した施蛰存の評論に接して、陳西滢は自らの論敵であった魯迅の小説論に敢えて踏み込んで、その解釈を糾したい「心理状態」に立ち至った。それほどに陳西滢の眼からは、施蛰存の議論は魯迅文学の歪曲と写ったということなのである。

陳西滢の「明天」論に入る前に、かなり回り道をした感もあるが、以上の経緯は、前提として理解しておく必要があると考える。

（2）陳西滢の施蛰存「明天」論批判

陳西滢の「『明天』解説的商榷」は、大よそ七千字余の評論であるが、施蛰存が自らの“功績”は西滢先生の“大論”を引き出したことであると述べるように、寡作な西滢が個別の作品を評論したものとしてはおそらく唯一のものではないと思われる。施蛰存の所論に即しながら丁寧に反論を対置するスタイルで論を進めている。その冒頭の、執筆動機を述べた下りでは施蛰存の新奇かつ意外な読みに対する驚きを皮肉な筆遣いで次のように表わしている。

魯迅の「明天」は、なにか奥深い意味があるとはこれまでは考えられてこなかった。しかし、『国文月刊』第1期で、施蛰存氏のこの小説についての解説を読んで、初めて、この文章の意義は自分が想像していたように明白なものではないということを知るにいたった。

（中略）

以前にこの小説を読んだ時に、（施蛰存に…斎藤注）指摘された点を読み取ることができなかったので、施氏の言に従えば「一字も読んでいないというべき」であって、自分の粗読みに責ありとせざるをえない。

ここでは、文学作品が一端作者の手を離れば多様な解釈に晒されうることを、一般論としては認めている施蛰存が、魯迅の隠晦から性愛の仄かな匂いを読み取れない者は実はこの小説を一字も読めていないと強調したことを逆手にとって反論の手始めとしたのである。続いて「明天」についての陳西滢を含めたこれまでの一般的な理解が提示される。

これまでこの小説は非常に単純に考えられてきた。なぜなら、そこで描かれているのは、一人の困窮する寡婦が、夫の死後、彼女のすべての愛、あらゆる希望をすべて三歳になる息子に託すのだが、不幸にも息子もまた病死してしまい、残されたのはただ孤独と空虚だけであった、ということであると受けとめられてきたのだから。

魯迅はこの小説で、読者に対して、愚かな田舎女の身の上に生活の悲哀を感じさせてくれたのだ。私が読み取ることができたのはただこの一点に過ぎなかった。

陳西滢の読みは、それ自体としては施蛰存によって否定されているわけではない。母性愛と明日への希望という心性から失望、絶望への転化、そして孤独と喪失の広がりには蛰存も指摘するところである。ただ陳西滢は、それゆえに蛰存の性愛的モチーフの指摘は成り立ちえないという立場から、その立論の根拠を一つ一つ否定し、結論的には再度、次のように自らの所説をまとめる。

総じて「明天」という小説は、私の見方では、非常に単純な、一人の人生の小悲劇にすぎない。それが人を感動させるのは、単四嫂子の孤独、空虚、取り除くことのできない絶望のゆえである。もし別の愛情というような要素を読み込んで行くならば、この小説の感動力は大いに減じてしまい、何の面白味も人生に対する理解も付け加えることはできないであろう。（中略）もしこのスタイルで施氏が述べるような目的を達しようとしているのならば、私の見方では、この小説は失敗作であると言わねばならないであろう。

要するに、両者の議論の分岐点は、施蛰存が主張する「単四嫂子の潜在意識の中では、阿五がまったく存在しないわけではない」という指摘を認められるか否かにかかってくると思われる。それについて陳西滢は、阿五が単四嫂子にとって性愛の対象にはなりえないことを蛰存の根拠に即して述べつつ、最後に「つまり結論的に言うと、単四嫂子の心の中には確かに阿五が存在した。しかしそれは招かざる郷村のゴロツキ（流氓）の影としてである」とする。

この指摘に対して施蛰存は「關於『明天』において、「興味深い」と応じ、次のように述べる。

「私も、単四嫂子にとって阿五は“ゴロツキの影”だと認めるが、それは彼女の顕在意識の“心”におけるイメージであって、潜在意識における阿五はまた別のもの、つまり（性愛の）“象徴”として存在している。」²⁴⁾「逆に言えば、単四嫂子の顕在意識においては、まだ阿五は（性愛の対象としては…斎藤注）存在していないということである。」²⁴⁾「従って、単四嫂子の潜在意識の中の阿五は一つの「象徴」(Symbol)に過ぎない。単四嫂子と阿五の二人についての描写に関する私のあらゆる読みはここから出発している。もしこの意見がなければ、私のすべての解釈は自ずと陳氏とまったく同じということになる。このように述べた蛰存は最後に、レオナルド・ダ・ビンチの「モナ・リザ」の中に、製作者の意図とは関わりなく「リビドー」の存在を認めたフロイトの例を引き、況んや魯迅には心理主義的な方法意識が自覚的に存在していたとする。そして、こうした解釈は「正しいか間違っているかという問題ではなく、可能か不可能かという問題なのである」と、陳西滢への反論を締め括る。

リビドー (Libido) はラテン語で羨望、欲望の意を表わす語に由来するという。フロイトにおいては「性の欲動は対象との関連、目標との関連、性的興奮の源泉との関連においてさまざまに変容してあらわれるが、その根底にあるものとしてのエネルギー²⁴⁾」を指すといわれる。施蛰存は阿五の単四嫂子に対する働きかけの根底にリビドーの存在を認めると同時に、単四嫂子の反応や意識の流露の裡にもそれらを衝き動かす根底的エネルギーとしてのリビドーを認めたということである。そして、そう解釈することは「可能」だということである。

このように見てくると、陳西滢には、施蛰存が主張する阿五の「象徴」(Symbol)的な意味がまったく理解できていないと言わざるを得ない。また、潜在意識という概念についても心理学的な規定に即して理解していたとは思われない。つまり陳西滢は作品の心理主義的な解釈をまったく受け付けておらず、ヒューマニスティックな物語小説の枠の中で解釈することに終始している。それは「明天」を非常にシンプルなまたイノセントな人生の物語として読む読み方であって、「文学は人生の批評である」あるいは「文学は個人の意識を向上させ、社会を啓発するという道徳的機能を持っている」と考えたマシュー・アーノルドら十九世紀英国の人文主義的な文学観を彷彿とさせる²⁵⁾。そしてそれはまた、近代西欧文学を受容した中国の20世紀10年代、五四文化運動期の文学者たちが文学に啓蒙的な機能を求めた、そのような文学思想とも重なるものであることを指摘しておきたい。一方、施蛰存の潜在意識を導入した読みは、教養主義・啓蒙主義に立つ人々からは驚愕と不快をもって迎えられたのであって、その事実が最も雄弁に小説批評における彼の「明天」論の歴史的意義を証明しているといえよう。

おわりに

『国文月刊』第1巻5期に載った、「²⁶⁾忠」署名の『『聴到』和『知到』の商榷」と題する今一つの文章が提起した問題については、施蛰存は「これはまったく粗忽なことであった」と、謂わばあっさりとい兜を脱いでいる。すなわち、「明天」第1章の第3節に次のような描写があった。

……ただ夜ふけに起きているのは二軒だけだから、この単四嫂子の家で音がしても、聞

(聴到)こえるのはむろん老拱たちだけ、音がしなくても、それに気づく(聴到)のは老拱たちだけなのである。

これについて、施蛰存は、魯迅の叙述の「粗捜し」のつもりで、「音がしなくても老拱たちには聞こえた(聴到)」ではおかしいので、「音がしなくても老拱たちにはわかっていた(知道)」に改めなくてはならないと述べた。

しかし「忠」は、「施蛰存は、ただ単に音がしなくなったのだから聞こえないと考えただけだが、“音がしない”のに“聞こえた”のは、それで、単四嫂子の家の状況を感じているのだということに思い至らない。音の有無ではなく、(聴)感覚を働かせて、単四嫂子の家の状況を“知った”ということだ。これは魯迅氏の相当な考慮を経た表現である。」と述べた。この点は施蛰存の明らかな勇み足である。ただ、施蛰存にはこのほかにも魯迅の文章における措辞が学生に悪影響をあたえている例を、学生の文章も引用して示すなど、学生の眼を意識した文章教育的な指摘が見られる。²⁷⁾

施蛰存は「關於『明天』」の冒頭で、特に重慶の誌紙において多くの人から誤解を受けたと述べ、例えば「魯迅の作品について、単に技巧に注意して分析するだけなのは重大な侮辱である。」「魯迅の作品が敬愛されるのは、その社会的意義の故である。」「故意に、魯迅氏の作品の社会的意義を抹殺して、もっぱら技巧にのみ注目するように青年を誘導しようとしている。」といった批判があったことを紹介している。これらの詳細についての分析は他日を期するほかはないが、施蛰存がこれらの評言を自分に対する「罪状」と受けとめてしまうような心理状態には明らかに背景と理由がある。かつて魯迅によって「第三種人の一味」と批判され罵られた施蛰存のような人物が魯迅を論ずることに対しては、やはり周囲の警戒が働いたであろう。魯迅の死後四年を経、抗日戦争の時代にあつて、魯迅の声価が高まる中で、例えば、施蛰存が新奇な趣向で魯迅文学を語ると、かつて魯迅とともに闘った人々からは、どうしても身構えて受けとめられてしまうような情況が醸成されつつあったのだと思われる。

注

- 1) 施蛰存は『国文月刊』の版が先ず重慶で出版されたため、重慶の論壇で議論を呼んだと述べている。当時の重慶は、蒋介石・国民政府の臨時首都であり、第二次国共合作の下で、国民党系の文化人だけではなく、旧左連系の芸術家や共産党支持の文化人も活動していた。林祥主編『世紀老人的話 施蛰存 卷』(遼寧教育出版社, 2003年6月)参照。
- 2) 『施蛰存七十年文選』、『施蛰存文集・十年創作集』等、施蛰存の多種のアンソロジーのいずれにも採録されていない。
- 3) 施蛰存著「緬懷開明」、執筆は84年12月、『我與開明』(中国青年出版社, 1985年8月)所収、その後「懷開明書店」と改題されて『沙上的脚迹』(遼寧教育出版社, 1995年3月)等に収められる。日本語訳は青野繁治訳『砂の上の足跡』(大阪外国語大学学術出版委員会, 1999年2月)所収。
- 4) 施蛰存はその後も、時々この件に言及している。例えば1993年10月23日台湾「中央日報・副刊」で梅新のインタビューに答えている。「第三種人 與現代雜誌主編施蛰存一席談」参照。また(注1)『世紀老人的話 施蛰存 卷』参照。
- 5) 李焯昆編著『魯迅小説研究述評』(西南交通大学出版社, 1989年4月)によれば許傑はその著書『魯迅小説講話』・「明天」(陝西人民出版社, 1985年)において施蛰存の「明天論」を批判的に紹介し

ている。また、袁良駿著『魯迅研究史・上』（陝西人民出版社、1986年4月）において、袁良駿氏は施蛰存の「明天論」を、魯迅を「曲解」した「奇文」と決めつけ、羅遜の「学習与研究」（『文学月報』第2巻第3期（1940.10））や「關於魯迅的《明天》」（『抗戰文芸』第6巻第4期（1940.12））などとはほぼ同趣旨の批判をしている。

- 6) このうち、羅遜著「關於魯迅的『明天』」、海銀著「讀了施蛰存說魯迅的『明天』」の二篇は『1913-1983魯迅研究學術論著資料匯編・3（1940～1945）』（中国文聯出版公司、1987年3月）にも収録されている。
- 7) 「關於『明天』」参照。
- 8) 聯大時代に沈從文を師として小説を書き始めた汪曾祺は「私が40年代に発表した作品はほとんどど的一篇もすべて沈先生の手を経て送り出されたものである。」（『我的創作生涯』、『汪曾祺全集』第六巻）と述べている。
- 9) 姚丹著「西南聯大中文系、外文系和校園里的新文學創作」（『中国現代文學研究叢刊』1999年1期）、姚丹著『西南聯大 歷史情境中的文學活動』（広西師範大学出版社、2000年5月）、黃延復著『二三十年代清華校園文化』（広西師範大学出版社、2000年3月）参照。
- 10) 施蛰存が行なった三十の分節について、それぞれの節の最初の部分を示しておきたい。(1)「音がしないな、(2)だいたい魯鎮は、(3)ここ数日、(4)老拱はどやされたが、(5)このとき、単四嫂子は (6)単四嫂子は愚かな女で、(7)待っていた単四嫂子 (8)単四嫂子はこれはいけない (9)まだ早いの (10)単四嫂子は処方箋 (11)日はとうに昇っていた (12)単四嫂子はこのときには (13)彼ら二人は (14)宝児が薬を (15)宝児の呼吸は (16)第一の問題は (17)咸亨の主人が (18)そのころ、(19)老拱の歌声は (20)白々とした夜明け (21)ああ、棺桶を (22)棺に蓋がされたのは、(23)しかし、単四嫂子は (24)この日一日中 (25)単四嫂子はひどい (26)彼女は立ち上がり (27)彼女はいま、(28)だが、単四嫂子は (29)単四嫂子も、ついとうとう (30)単四嫂子はもう眠りに
- 11) 本稿で引用する翻訳は、丸山昇訳「明日」（学研版『魯迅全集』第2巻「呐喊・彷徨」）に拠る。
- 12) 『心理学辞典』（平凡社、S49、30版）、フロイト著「『精神分析』と『リビドー理論』」（『フロイト著作集』第11巻、人文書院、1971年版）、フロイト著「精神分析入門」（第26章）（『フロイト著作集』第1巻、同上）、フロイト著「性欲論三篇」（『フロイト著作集』第5巻、同上）参照。
- 13) 『凌叔華文存』（下巻）附録、鄭麗園著「如夢如歌」（四川文芸出版社、1998年12月）
- 14) 陳西滢の略歴については、閻焜明著『魯迅と陳西滢』（河北人民出版社、2002年1月）参照。
- 15) 『西滢閑話』は、陳西滢の民国期におけるほとんど唯一の文学関係の著作である。近年では「中国現代散文名家名作原版庫」全30巻（中国・文聯出版社、1993年）にも入れられている。また1970年に台湾・萌芽出版社から『西滢後話』が出版されている。
- 16) 前掲（注14）『魯迅と陳西滢』は、魯迅と陳西滢の関係に焦点を当てて女師大事件を分析している。また、陳漱渝著・山内一恵訳「魯迅と女師大事件」（中国文芸研究会『野草』第71号、2003年2月）は、1993年に大阪で行なわれた講演の翻訳であるが、当時すでに陳西滢の文学史的な評価などについて定説に拘わらない新しい見方を提示している。
- 17) 『現代評論』第2巻第48期（1925年11月7日）、『西滢閑話』所収。
- 18) 『現代評論』第2巻第48期（1925年11月7日）、『西滢閑話』所収。
- 19) 『現代評論』第1巻第25期（1925年5月30日）、『西滢閑話』所収。
- 20) 『現代評論』第2巻第50期（1925年11月21日）、『西滢閑話』所収。
- 21) 『現代評論』第3巻第71期（1926年4月17日）及び同第3巻第72期（1926年4月24日）、いずれも『西滢閑話』所収。
- 22) 前掲（注14）参照。
- 23) 前掲（注16）「魯迅と女師大事件」参照。
- 24) 『ラプラッシュノポンタリス著・村上仁監訳『精神分析用語辞典』（みすず書房、1977年5月）参照。
- 25) ヘレン・ガードナー著・和田旦・加藤弘和訳『想像力の擁護』（みすず書房、1984年12月）、内田能

嗣編『ヴィクトリア朝の小説 女性と結婚』（英宝社、1999年9月）等参照。

- 26) 「忠」という筆名については不詳。ただ、北京大学中文系の教員に王忠という名前が見え、西南聯合大学にも参加しているので、あるいはこの人であるかもしれない。『国文月刊』第76期（1949年2月）に「論『古文觀止』的選文標準」という論文がある。
- 27) 施蛰存は「文芸作品解説之一魯迅『明天』」で次のように述べている。魯迅はよく「不明白這‘但’字的可怕」という言い方をして、「但」の字の上に圈点を付けたりするけれども、近年の学生の文章の中にもしばしばこうした言い回しが見られる。例えば「節約という二字は抗戦建国の中で最も重要なことである。」「勤という字は成功の大道である。」「全面抗戦は統一というこの二字にかかっている。」このいくつかの「字」という字はすべて取り去るべきである。抗戦建国において必要なのは「節約」という行為であって、その二つの文字ではない。「勤」も「統一」も同様。学生諸君に留意するように望みたい。

〔付記〕本稿を執筆していた03年11月19日、施蛰存氏が、入院していた上海の華東病院で亡くなった。享年98歳であった。30年代の現代主義文学を担った作家の最後のひとりが逝った。心から哀悼の意を表したい。